

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：32633

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K12984

研究課題名（和文）プロジェクトアドベンチャーの概念を内包した森のようちえん保育者養成教材の開発

研究課題名（英文）Development of educational materials for teachers in Forest kindergarten that encompasses the concept of project adventure

研究代表者

菊田 文夫（KIKUTA, FUMIO）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：60234184

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「森のようちえん」保育者の資質について、PA（Project Adventure）の視点から言及することを目的とし、山梨県の「森のようちえん」1施設を研究対象とした。保育者に必要と考えられる具体的な資質を抽出するため、保育者が一日の活動をふり返って保護者に向けて語った語りについて、実践場面で得た画像ならびに音声を参考としながらナラティブな分析を行った。その結果、保育者には「子どもによって、チャレンジしたいことや、チャレンジしたいと思えるタイミングは異なる」、子どもには「安心してチャレンジに向き合えるような準備が必要である」などの点を意識した幼児の活動支援が重要であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to examine the attributes of supervisors at Forest Kindergartens from the point of view of PA(Project Adventure). This study was based on a Forest Kindergarten at a facility for outdoor activities in Yamanashi Prefecture, Japan. To identify concrete attributes necessary for childcare staff, the speech contents of childcare staff were transcribed when they talked about activities with parents at the end of the day. Results suggest that childcare staff at Forest Kindergartens should support the children's activities while being aware that children are able to understand and accept that differ in terms of the challenges they want to attempt and the timing for undertaking these challenges; and need preparation to engage in challenges without worry. Furthermore, childcare staff should not make light of children's abilities and possibilities and should strive to help them realize things themselves, not to control their behavior.

研究分野：子ども学（子ども環境学） / 生活体験・子育て支援・森のようちえん・いのちの教育・生きかたの教育

キーワード：森のようちえん 指導者養成 教材開発 自然体験活動 プロジェクトアドベンチャー

## 1. 研究開始当初の背景

豊かな自然のもとで幼児教育や保育を実践する「森のようちえん」は、1970年代初頭に始まった、ヨーロッパを起源とする取り組みである。その教育的効果については、ドイツのペーター・ヘフナー(2009)が、森のようちえん出身の小学生にみられる特徴として、授業中の協働、動機づけ・忍耐・集中、社交的行動について、高い評価を得ていると報告している。しかしながら、わが国においては、これらの理念を、幼児教育や保育の実践として具現化していく取り組みが、多くの施設で行われているものの、森のようちえんの実践に即した保育者養成教材や、活動の質を高めるための方策について検討している研究はみられない。

一方、森のようちえんでは、幼児自らの意思によって、協働や挑戦が頻繁に行われる。これは、自分の参加の度合いと方法を自分自身で決められることができるというプロジェクトアドベンチャー(以下PAと略す)の理念、「チャレンジ・バイ・チョイス」に合致するものであると考えられる。PAでは、仲間の努力を肯定的にお互いが評価するという約束が強固な土台となり、信頼関係の確立、達成感を感じるために必要なゴールの設定、挑戦に意義を見いだそうとする心の姿勢を育むチャレンジ、達成感を味わい、困難な課題に立ち向かう強い内発的動機づけを促す問題解決を通して、自己概念向上への効果が認められている。看護大学生を対象として、チャレンジプログラムに含まれる冒険の効果を検証した申請者の研究においても、達成感を得ることができた体験は、自己概念の向上と、将来にわたって、チャレンジを続けていきたいという想いの醸成に寄与していることが明らかになった。

以上の点から、協働や挑戦の場面を、幼児が成長する絶好の機会として捉える、新しい幼児教育の方法論を提案する意義は大きい。

## 2. 研究の目的

(1) 森のようちえんにおいて、幼児らが自らの意思で行う、自然発生的、突発的な協働作業や冒険への挑戦場面を観察し、PAの視点から、協働作業や冒険への挑戦の目標設定に関する発生機序や成立条件を明らかにする。

(2) 森のようちえんにおいて、幼児らが自ら意思をもって設定した行動目標を達成する過程について、PAアクティビティとして体系化する。

(3) このような協働作業や挑戦場面を見まもり支援する、熟練した保育者の効果的なかわりを観察し、幼児の自己概念向上を目標とするPAの視点から、保育者のスキルアップに貢献できる、森のようちえん保育者養成のためのガイドブックを作成する。

なお、本報告では、森のようちえん保育者養成のためのガイドブックを作成する基礎

的資料として、森のようちえんにおいて繰り広げられる、幼児の協働作業や挑戦的活動に対する指導者の関わり方をPAの視点から明らかにする。そのため、幼児が森のようちえんで活動する、さまざまな場面について記述した逐語録に質的分析を適用することによって、まずは森のようちえんの指導者が幼児と向き合う際に必要とされる資質について、具体的に明らかにすることを目的とする。

なお、本報告は、本研究の成果について、すでに公表している菊田(2018)に一部加筆したものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究対象

山梨県の自然体験活動施設1施設において、2016年11月から2018年3月の間に1泊2日あるいは2泊3日の日程で10回開催された、行事型の森のようちえんを研究対象とした。毎回の参加者は、3歳から5歳までの幼児、約30名とその家族で、その構成は毎回異なっている。幼児が定期的に通園する森のようちえんとは異なり、本研究の対象とした行事型森のようちえんでは、開催時期にあたる季節の特徴を最大限に活かしたプログラムを計画し、活動場所を選定する。なお、森のようちえんの活動は、幼児と指導者で実施されたものであり、保護者を含むものではない。

### 参加観察

熟練した保育者に観察される実践の特徴について記録するため、森のようちえんで3年以上の保育経験を有する保育担当者2名を対象とした。

対象者には、幼児が活動している様子を身近な距離から記録する目的で、ウェアラブルカメラを装着してもらうとともに、幼児同士の会話を明瞭に記録するため、ICレコーダーを携帯してもらった。さらに、このうちの1名については、収集した資料の分析に必要と考えられる、保育者の気づきに関するインタビュー調査をあわせて実施した。

さらに、研究者の視点から、森のようちえんで繰り広げられる、幼児同士、幼児と保育者の協働作業や、幼児が自らの意思で行う挑戦的活動を記録するため、デジタルビデオカメラと望遠レンズ付き一眼レフデジタルカメラによる撮影を行った。その際、幼児同士、幼児と保育者とのかわりへの影響ができる限り及ばないように留意した。

### 活動のふり返し記録

本研究の対象とした施設において開催される森のようちえんでは、毎日の夕食後に必ず保護者との交流会が持たれる。その場では、幼児が保護者と離れて活動した様子のふり返りが行われ、スライドショーを交えながら、これらのエピソードが語られる。

そこで、森のようちえんの指導者に必要と

考えられる具体的な資質を抽出するため、10年以上の指導経験を有する指導者が保護者との交流会において語った、活動の振り返り内容をデジタルビデオカメラを用いて記録した。

## (2) 分析方法

森のようちえんの指導者に必要と考えられる具体的な資質を抽出するため、10年以上の指導経験を有する指導者が、保護者との交流会において、幼児とともに森で過ごした一日の活動をスライドショーを交えながら語ったエピソードから、逐語録を作成した。

さらに、逐語録の中から、幼児の協働作業や挑戦的活動について語られている部分を抽出し、これらの場面を、より詳細に記述するため、前項(1)研究対象の参加観察で述べた映像と音声データを客観的資料として活用した。

これらの内容に基づいて、a) フルバリュー・コントラクト、b) チャレンジ・バイ・チョイス、c) 体験学習のサイクル、d) ファシリテーション、e) 子ども観、というPAの重要な5つの概念ごとに、質的分析を行った。その際、PAの視点からみた、幼児の活動に対する指導者の意味ある対応に着目して、指導者が保護者に語った振り返りの内容を分類し、森のようちえんの指導者が幼児と対峙する際に必要とされる資質に関する項目を抽出した。

なお、この分析にあたっては、プロジェクトアドベンチャー・ジャパンの高野哲郎氏からのスーパーバイズを受けた。

## (3) 倫理的配慮について

本研究の実施にあたっては、研究協力依頼書を森のようちえんの指導者と、これに参加する幼児の保護者に配布し、研究の内容について具体的な説明を行った。研究協力に関する同意は書面で得ている。なお、本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施したものである。(承認番号16-A058)

## 4. 研究成果

森のようちえんの指導者が幼児と向き合う際に必要とされる資質について、PAの理念を含む5つの概念ごとに抽出した結果を示す。ここでは、それぞれの概念について、幼児の活動に対する指導者の意味ある対応と考えられる内容について述べる。

### a) フルバリュー・コントラクト

幼児それぞれの興味関心の相違、遊び方の違いを尊重する「互いに尊重し合い、違いを認める」こと、幼児が活動に向かうペースや、遊びに向かう気もちの違いを大切に「活動のペースが異なることを認める」こと、幼児が自らの意思をしっかりと表現できるように、幼児の感情を受け止める「幼児の意思を

尊重できる」こと、幼児も指導者も互いに尊重し合い、幼児の価値観をそのまま受け止めて否定しない「指導者も含めて互いを尊重し合える」こと、幼児同士で「幼児同士でフルバリューな関係が築けると思える」ことがあげられる。

### b) チャレンジ・バイ・チョイス

森には幼児自身で遊びを選べる環境がある。そのため、「幼児によって、チャレンジしたいことや、チャレンジしたいと思うタイミングが異なる」こと、幼児の不安を受け止め、「幼児が安心して自らチャレンジに向き合えるような準備が必要」であること、幼児自らが選んで行動しているため「幼児は自分が選択した行動に責任を持てる」こと、幼児自身が納得するまでチャレンジできている場合、すなわち「遊び切った感覚を持てる」と、すぐに次の行動に切り替えられる」ことを指導者は理解している必要がある。

### c) 体験学習のサイクル

体験学習においては、自発的なチャレンジによって得られた結果を注意深く観察し、その結果を導いた原因を探求することによって、新たなチャレンジに向かうための糧とする、一連の行動をサイクルとして連続させることに意義がある。その過程で、幼児自身が「体験学習で達成感を感じる機会を得ていること」や「体験学習で学んだことを次の行動に活かすことができること」を指導者は理解している必要がある。

### d) ファシリテーション

あくまでも「活動の主体は幼児である」こと、「幼児から気づきを引き出す」ことが指導者としての大切な役割であること、指導者が「幼児の行動をコントロールしない」こと、危険が顕在する場面においても指導者はすぐに手を出すことなく、「リスクに対する対応を幼児に委ねる」ために、その状況を注意深く見まもること、「幼児に大人のルールを押し付けない」こと、幼児が自ら能動的に取り組むアドベンチャーについて、「大人の価値観で判断しない」ことを指導者は理解している必要がある。

### e) 子ども観

幼児は、自ら選び、取り組む力を有しており、「幼児の力や可能性を軽んじない」こと、「幼児はひとりの人間である」こと、群れて遊ぶ「幼児の群れは魅力的である」こと指導者は認識している必要がある。

森のようちえんでは、偶発的な状況の連続によって、遊びが生み出され、幼児同士が相互に働きかける機会が多くみられる。また、幼児同士の会話がプロジェクト型で協同的な活動を生み出すという大きな特徴を有している(杉山(2013))。さらに、幼児は、た

だ面白いから遊ぶ、という活動を通して、互いに知恵を出し合い、仲間とともに生きるスキルを身につけていく。そこで、「森のようちえん」の指導者は、知識や技能を一方的に教えるのではなく、活動の内容に沿った問いかけを幼児に向けてことによって、幼児が主体的に思考し、自ら遊びを深められる環境づくりと教育的支援が必要である。さらに、経験を活かして新たなチャレンジに取り組める、試行錯誤の機会と時間をたっぷり確保することによって、幼児自身が体験学習のサイクルを応用した学び方を習得できると考えられる。

本研究で抽出された「互いに尊重し合い、違いを認める」ことは、PAの理念のひとつである、フルバリュー・コントラクトであり、幼児一人ひとりの個性を大切に受け止めることにつながる。多くの教育現場において重要だと考えられている仲間との協調や協働は、遊びの過程で生まれてきてはいるが、本研究の対象施設では、指導者の介入や促しによるものではなく、あくまでも幼児同士の自由な遊びの副産物として捉えることができた。これは、幼児一人ひとりの気持ちや行動が尊重されている結果であると考えられる。ペーター・ヘフナー(2009)は、ドイツの森のようちえん出身の子どもについて、特に授業中の協働において優れ、動機づけ・忍耐・集中、および社会的行動において、正規の幼稚園出身の子どもよりも高い評価を得たと報告しているため、幼児が自主的に協働する活動を見まもる意義は大きい。また、幼児が全員で同じ遊びに取り組むように指導者から強制されることなく、幼児自身が自分の希望する遊びを主体的に選択できること、幼児が選択した遊びについて指導者が否定や禁止することのない環境が提供できると、PAの理念であるチャレンジ・バイ・チョイスが保証される。

近年、子どもに与えられる許容範囲が、さまざまな面において減少し、子どもが自発的な行動を通して成長する過程が省略される傾向にある(小西(2005))。そこで、森のようちえんの指導者には、幼児には自ら考え、行動する力を有しているという信念のもと、魅力的なアドベンチャーを提供するために、幼児が危険を認知しつつも取り組んでみたいと思える、刺激のある環境づくりが望まれる。また、人為的に操作できない自然の中から、遊びの種を見つけることができる豊かな環境に価値を見いだせること、幼児それぞれがもっている時間の流れを大切にすること、幼児が夢中になっていることには、すべて意味があると捉えることが求められる。自分が気づいたことを的確に言語化できない幼児を注意深く観察し、指導者自身が本研究で明らかにされた資質を高めながら実践に取り組むことによって、わが国の「森のようちえん」の質の向上が期待できると考えられる。

さらに本研究で得られた結果は、施設や遊具などが既定された環境のもとで幼児教育を実践している都市部の幼稚園や保育園、認定こども園においても、指導者養成に必要と考えられるものばかりである。そこで、今後、これらの園における指導者養成に活かすべき具体的な方策について検討する必要がある。

本研究は、1年に数回、行事型で行われている森のようちえんを対象とした。そのため、毎回の参加者の構成が異なる。そこで、本研究の結果を一般化するためには、通園型の森のようちえんにおいても同様の研究を行う必要がある。また、本研究の結果は、森のようちえんの指導者の語りを対象として、PAの重要な5つの概念に限って質的分析を行ったものである。これら以外の新しい概念を発見するためには、新たに探索的な質的分析が必要である。

以上、本研究で明らかになった、森のようちえんの指導者が幼児と向き合う際に必要とされる資質は、熟練した保育者が語るエピソードと、実践の場面において記録された画像、音声データに裏付けられるものである。さらに、これらのデータには、幼児が仲間と協働し、冒険に挑戦する機会や、遊びを共有する仲間との「基本的信頼」の獲得を促すと考えられる仲間同士のかかわりが、一部ではあるが記録されている。そこで熟練した保育者が語るエピソードと併せて、幼児の自発的活動を保育者がどのように支援すれば効果的であるのか、について、森のようちえんに関わる若手指導者や、子育てに奮闘している親に向けた、わかりやすい教材づくりに活用できる。

森のようちえんでは、幼児自らの意思によって、協働や挑戦が頻繁に行われる。そこで設定される目標は、既存の園舎や園庭など、人工的な環境のもとで決められるものとは異なり、保育者の想像を突き抜ける、予想が困難なものである。そのため、保育者が子どもの体験をコントロールしようとする構えが減少し、人として一緒に受けとめようとする姿勢に変化する、という、指導者の意識を変える可能性を秘めていると考えられる。

森のようちえんは、協働と冒険への挑戦を体験できる宝庫である。そこで、この体験を通して幼児が自己概念を高めていけるような、ファシリテーターとしての保育者のスキルを高めていく必要がある。そこで、現在、森のようちえんの指導者が幼児と向き合う際に必要とされる資質について、具体的な活動場面を写真や動画などで示しながら、そこで展開されたエピソードを交えて、わかりやすく解説するガイドブック(指導者養成教材)を作成している。

今後、森のようちえんに携わる保育者の養成、ならびにOJTの教材として、このガイドブックを活用することにより、わが国にお

ける幼児教育の更なる質の向上が十分に期待できる。さらに、子育てに奮闘している親に向けて、このガイドブックを上梓することは、核家族化している子育て事情特有の不安や悩みに応える「子育て教材」としての活用が期待できる。このように本報告で述べた研究成果、ならびに、近日中に公表を予定しているガイドブックは、わが国の子育て支援に大きく貢献できるものと考えられる。

#### 謝辞

本研究にご協力いただいた幼児とその保護者、森のようちえんの指導者の皆さまに厚く御礼申し上げます。さらに、分析にあたってスーパーバイズをいただいた、プロジェクト・アドベンチャー・ジャパンの高野哲郎氏に感謝申し上げます。なお、本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）「プロジェクトアドベンチャーの概念を内包した森のようちえん保育者養成教材の開発」（研究代表者；菊田文夫）（16K12984）による補助を受けて実施したものである。

#### 引用文献

- ・菊田文夫，自然体験活動を通して幼児の発達を支援する「森のようちえん」指導者の資質について，いのちの教育，査読有，第3巻第1号，2018，7 - 15．

#### 参考文献

- ・小西貴士（2005）．「森の幼稚園」の実践から幼児の発達を考える，小児科臨床，58(4)，581-588．
- ・Miklitz,I(2007)．Der Waldkindergarten：Dimensionen eines pädagogischen Ansatzes, (3.Aufl.)，Scriptor Verlag, GERMANY．
- ・森のようちえん全国ネットワーク連盟（2008）．森のようちえんとは，<<http://morinoyouchien.org/about-morinoyouchien>>，（2018年1月5日アクセス）．
- ・森のようちえん全国ネットワーク連盟（2016）．第1回森のようちえん全国実態調査（2014年度実施）結果，2016.11.7．，<<http://morinoyouchien.org/learn/secretariat/post-1860.html>>，（2018年1月5日アクセス）．
- ・ペーター・ヘフナー，佐藤竺訳（2009）．ドイツの自然・森の幼稚園 就学前教育における正規の幼稚園の代替物，公人社．
- ・プロジェクトアドベンチャー・ジャパン（2005）．グループのちからを生かす 成長を支えるグループづくり，みくに出版．
- ・佐藤史浩，磯部裕子（2011）．森の幼稚園 教育的な試み，宮城学院女子大学発達科学研究，11，43-51．
- ・杉山浩之（2013）．「森のようちえん」の理念と研究課題，広島文教女子大学紀要，48，

13-27．

#### 5．主な発表論文等

- 〔雑誌論文〕(計1件)
- ・菊田文夫，自然体験活動を通して幼児の発達を支援する「森のようちえん」指導者の資質について，いのちの教育，査読有，第3巻第1号，2018，7 - 15．
- 〔学会発表〕(計4件)
- ・菊田文夫，子どもを対象とする「いのちの教育」について，第19回日本いのちの教育学会 クロージングセッション，鹿児島県出水市，2018年3月3日．
- ・菊田文夫，自然体験活動を通して幼児の発達を支援する「森のようちえん」指導者の資質について，日本学校保健学会第64回学術大会，宮城県仙台市，2017年11月5日．
- ・菊田文夫，森のようちえんの実践を通して「いのちの教育」を考える，第18回日本いのちの教育学会研究大会，岡山県岡山市，2017年02月25日．
- ・菊田文夫・佐々木豊志，実践者と語る森のようちえんが大切にしたいこと，第12回森のようちえん全国交流フォーラム（招待講演），北海道亀田郡七飯町，2016年11月5日．

#### 〔図書〕(計0件)

#### 〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

#### 〔その他〕

なし

#### 6．研究組織

##### (1)研究代表者

菊田 文夫（KIKUTA, Fumio）  
聖路加国際大学・大学院看護学研究科・  
基盤領域（健康教育）・准教授  
研究者番号：60234184

##### (2)研究分担者

なし

##### (3)連携研究者

なし

##### (4)研究協力者

なし